

モンテッソーリの「子どもの家」 百周年記念国際会議に出席して

早田由美子

はじめに

今年二〇〇七年一月六、七日、イタリアのローマに新しく造られた音楽公園劇場（アウデイトリアムパルコ・デッラ・ムジカ）において、マリア・モンテッソーリの「子どもの家」創立百周年を記念して盛大な国際会議が開催されました。モンテッソーリを研究してきた者として、世界中のモンテッソーリ研究者が集まるであろうこの会議にぜひ参加したいと思い、正月の行事でにぎわう日本をあとにして、ローマに向かいました。このレポートでは、この会

議に至る百年間の簡単な経緯と、会議の模様をお伝えしたいと思います。

百年前の「子どもの家」

「子どもの家」はちょうど百年前の一九〇七年の一月六、七日、ローマのスラム街サンロレンツォ地区につくられました。この地区はローマのテルミニ駅東側にあり、近くには国立ローマ大学もあります。現在、この場所は、最近のヨーロッパの大都市ではしば見られる独特の字体による壁の落書きはあるものの、かつてスラム街であった面影はありません。



▲サン・ロレンツォの「子どもの家」を見学する参加者

ん。しかし、当時、この地区では、建設途中で放置された建物に社会の底辺にいた人々が住み着き、劣悪な環境の中で生まれた子どもたちが十分な教育を受けられないまま育っていました。この地区の三歳から七歳の子どもを集めて、モンテッソーリが幼児教育を行った場所が「子どもの家」です。

ローマ大学の医学部に女性として初めて入学したモンテッソーリは、障害児治療教育に関心をもち、先駆者であるイタールとセガンの方法を自ら資料を集めて学び、それとともに実践も行いました。触覚や視覚などの五感を個別に訓練するという方法を障害児の様子を見ながら取り入れることによって、彼らの成長発達に大きな成果を得ました。

さらに、モンテッソーリは障害児に適用して効果を得た方法を健常児に適用するという、「コロンブスの卵」のような発想の転換を行いました。スラムの子どもは障害児が用いた教具で作業した結果、興

味や集中力が引き出され、さまざまな作業に打ち込み、どんどん変化していきます。その様子が世界中に伝えられて「子どもの家」は一躍有名になり、世界各国から多くの人々が視察に訪れます。ちなみに当時の日本では、黒岩涙香の『万朝報』という新聞でモンテッソーリの幼児教育を報じています。

モンテッソーリは、イタールやセガンの教具をそのまま用いるのではなく、長さや厚みや形を変化させたり、独自に新たな教具を開発したり、フレールベルの恩物なども応用したりして、子どもの興味や集中力が継続するものを取捨選択し、多様で体系的なモンテッソーリ教具を確立していきます。この時、彼女は障害児の問題、貧しい子どもたちの問題、女性の問題に関心を深めていました。つまり、当時社会的偏見と社会の仕組みによるしわ寄せを最も受けていた人々の問題を憂えていました。ここで詳しく書く紙幅の余裕はありませんが、モンテッソーリの教育

思想の根底には社会的弱者への思い、そして、その困難を克服するための教育の重要性への思いがあることを覚えておく必要があります。

今日再び高まるモンテッソーリへの関心

一九〇七年にローマに開設された「子どもの家」はイタリアだけではなく、その後、スイス、フランス、イギリス、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ドイツなどに次々と開設されていきます。しかし、百年間、常に目の見ていたわけではありません。

一九一〇年代には、モンテッソーリ・ブームと言われるほどの脚光を浴びますが、アメリカの進歩主義者からの批判や二度の世界大戦などもあり、一時的に衰退気味の時期もありました。

しかし、アメリカでは人工衛星の打ち上げ競争でソ連に負けたスプートニク・ショックの後、六十年代から再びモンテッソーリ教育が見直され、環境に

恵まれない子どもに対するヘッド・スタート計画でも活用されました。また、イタリアでは特に九〇年代にモンテッソーリの社会的活動や女性運動に関する実績の評価が進みました。新たな研究書の出版やモンテッソーリの著書が装丁も新たに再版されるなどの動きも活発に行われています。二〇〇一年に出されたモンテッソーリに関する世界の研究論文の題目だけを集めた本は、掲載論文総数約一万五千編、厚さ約十数センチの大著で、長年にわたってもち続けられた世界中の研究者の関心の高さを物語っています。

現在、モンテッソーリ協会の本部はオランダに置かれており、また、このたびは、ローマで百周年の記念行事が開かれ、世界各国からの参加者を集めたことは、その国際的な定着を示しています。今回の会議に参加して、百年という長い年月に耐えて、時代を超え、国を越えて、広がりをもつモンテッ

ソーリの影響力の大きさを改めて認識することになりました。

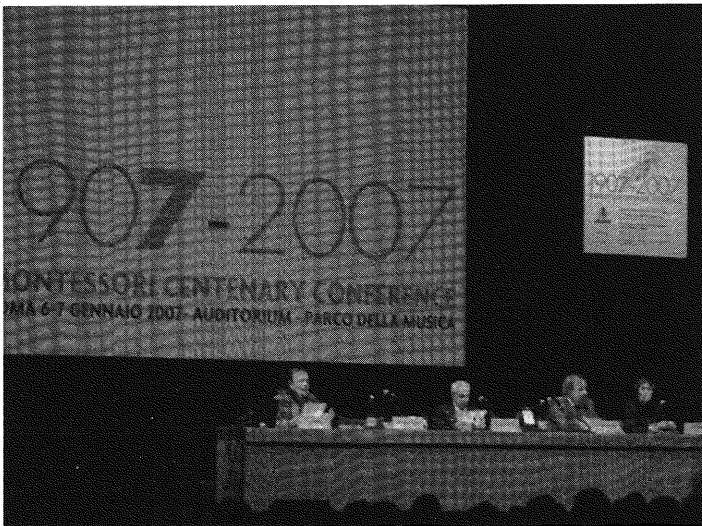
会議第一日目の模様

前置きが少し長くなりましたが、二日間にわたって行われた会議の模様をお話ししましょう。

会議は、各国からの参加者に合わせて、イタリア語、英語、スペイン語、フランス語、日本語の同時通訳付きで始まりました。十時半から、イタリアの研究者ア・サンティス氏とオランダにあるモンテッソーリ協会本部の部長アンドレ・ロベルフロイド氏により、モンテッソーリ教育の現状が述べられ、現在約百十か国で二万二千のモンテッソーリ・スクールが運営されていると紹介されました。そして、イタリア大統領、教育大臣、郵政大臣、ローマ市長、キアラパッレ市長（モンテッソーリの生まれ故郷です）の祝辞が紹介されました。このうち、郵政大臣

とキアラバッレ市長、ローマ市長に代わって祝辞を
読み上げたローマ市助役、さらには、後に登場した
ナポリ市長が女性であったことは、今日のイタリア
における女性の進出を自然に示すことになりました
た。女性が医学部に進学することでさえ多大な困難
が伴っていたモンテッソーリの時代。それからの百
年の年月がもたらした社会の変容を感じざるを得ま
せんでした。

十二時から行われたローマ大学の女性の研究者ト
ラバルツイーニ氏の講演では、障害児、貧しい子ど
も、搾取され低い地位にあった女性に対するモン
テッソーリの問題意識と人間の解放家としての貢献
が明らかにされ、年齢、障害、性、国籍を問わず、
独立した自由な人間の確立をめざして教育を行った
ことが指摘されました。この彼女の視野とスケール
の大きさが、今日もなお世界の人々を引きつける力
を保ち続けるのかもしれない。



▲会議で講演するシンポジスト

十二時半からは会場のロビーを利用して立食で美味しい食事（もちろん全部イタリア料理です！）が振舞われ、参加者の交流が行われました。

十四時半からはローマ大学のオリヴィエーロ氏とバージニア大学のリラード氏が心理学の立場から、それぞれ脳と認知の問題やモンテッソーリ教育の効果をテーマにした講演を行いました。また、イタリアのメーラー氏により算数教育に関するモンテッソーリの思想と方法についての分析も行われました。十七時半からはモンテッソーリ関連の優秀な卒業論文に対する表彰が行われ、イタリアの大学の六名の学生が賞を授与されました。

会議第二日目の模様

二日目午前中のテーマは平和と教育で、アメリカの教師養成センターのハインツ氏とフィレンツェ大学のカンビ氏らにより、モンテッソーリの平和のた

めの教育思想が浮き彫りにされました。

午後は、モンテッソーリの孫のレニルデ・モンテッソーリ氏とイタリアのグラッツィーニ氏の講演があり、最後は世界のモンテッソーリ・スクールで実践を行う保育者からの現状報告で締めくくられました。メキシコ、ウクライナ、アメリカ、日本、韓国、南アフリカ、ブラジル、そして、ヨーロッパの代表による報告はどれも興味深いものでしたが、とりわけメキシコと南アフリカからの報告が心に残りました。

メキシコのカメス氏はモンテッソーリ教育に関する著作もある女性で、メキシコで貧困層の子どもに長年教育を行っています。彼女はメキシコにおける移民、麻薬、エイズ、そして女性の低い地位の問題に触れて、平和と正義のためにモンテッソーリの方法を用いることの意味を述べていました。そして、子どもが人間としての基本的技能 (basic human

skills) を発達させることによって問題の解決の道が開かれると示唆しました。その技能とは、「集中力」(concentration)、「人生の受容」(to accept life)、「平和性」(peacefulness)、「喜び」(joy)、「関係性」(whole relationship) です。人間が生きる上で必要な基本的技能をこのように定義されたこと、そして、このような技能を発達させるために貧困層の子どもに地道な教育が続けられていることに深い感動を覚えました。

打ち込めることを見失い、自殺や暴力や不安や孤独におびえている現代の子どもにとって、いずれの「技能」も成長とともに着実に形成していく必要があるものと思われれます。これらを身につけられれば、どれほど穏やかで優しく素敵な世界になるでしょう。

もう一人の南アフリカの保育者は、貧困の激しいケープタウンの町で「子どもの家」の実践を行って

います。この国には三百以上のモンテッソーリ・スクールがありますが、この国の五十パーセント以上の地区が貧困とエイズの害を受けています。子どもたちは十分な栄養摂取ができておらず、学校の目的の一つは、子どもたちに温かい食事を提供することでもあります。教育費は、子ども一人につき月四ユーロ(六百五十円くらい)かかり、貧しい階層の親にはとても高額で子どもを幼児学校に通わせられません。しかし、学校に行けない子どもは学校に行きたくて仕方がなく、学校の窓にしがみついて中を見ているそうです。

報告者は「学校への渇き(または、学びへの渇望)」と表現され、発展途上国のこの子どもたちには満ち満ちているが、先進諸国の我々に欠いているという意味で、「我々の方が(気持ちの上で)貧しいのかもしれない」という問題提起をされています。この言葉も非常に心に残りました。国際会議に

出席する意義はこのような大きな観点を得られるところにあるように思います。

学ぶことを渴望している子どもたちは学べず、教育を受ける機会を得ている子どもたちは学ぶことに飽きているという、現代の皮肉な世界事情が浮き彫りになった報告でした。

この会議において、海外で実践を続ける多くの保
育者と運営者と個人的に話をする機会も得ました。
パキスタン出身で、現在ロンドンでモンテッソーリ
の「子どもの家」を運営している方々、ドイツ・ベ
ルリンの「子どもの家」で教育を行っているシス
ター、モンテッソーリ教育を研究者の立場から支援
しているローマ大学教授、イタリア生まれで国籍は
オーストラリアだが現在インドのモンテッソーリ・
スクールで指導している方、スイス、カナダ、イギ
リス、スペインの「子どもの家」の園長など、たく

さんの方々です。

スペインで千二百名を擁する学校を息子と経営し
ている六十二歳の女性は、そのうち二百二十名が
「子どもの家」の園児であり、小学校や中学校でも
モンテッソーリの方法を適用し、教師養成コースも
開校していると話されていました。一方、貧困地区
での子どもの保育のためには教具が高価すぎるとい
う現場の声もありました。

今回の会議に参加することで、モンテッソーリの
思想と方法の世界的広がりを実感することになりま
した。また、メキシコのカメス氏の指摘にあった、
子どもがもつ潜在的な可能性を伸ばすだけではなく、
競争に打ち勝つためではなく、打ち込めるもの
に出合って自分を確立し、平和を愛し、良い人間関
係を結び、人生を受容し、喜びの中で生きられる力
につながっていく教育の意味を深く考えることにな
った会議でありました。

(夙川学院短期大学)